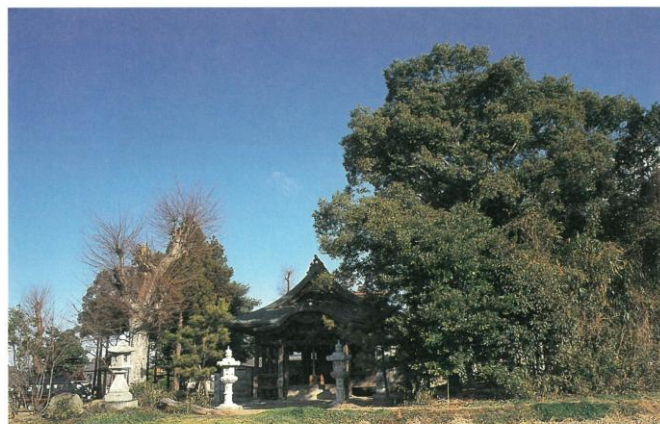


石手川緑地。山と市内を結ぶ緑の回廊となる



校庭の樹林は緑のネットワークの重要な要素 (川内町東谷小学校)



神社の森は市内に点在する緑の小島 (松山市久米町龍神社)



松山城山は巨大な野生の生き物の集散基地



木と人間 10

都会に点在する緑の島

松山東雲短期大学

松井 宏光

Hiromitsu Matsui

鳥になって空高くから松山平野を眺めてみよう。

ビル群の真ん中に、松山城山の濃い緑の島がまず目に付く。城山の広大で鬱蒼とした緑は、鳥にとっては巨大な安全基地だ。

市内を横切る細長い緑の帯は、石手川の河畔林だ。山裾から続く樹林帯はまるで鳥たち野生の生き物が移動するための回廊のようだ。

町中に点在するこんもりとした緑は、神社の森だろう。シイやクスノキの太木に囲まれた緑の空間は、鳥が移動する際の重要な休憩場所であり避難場所である。

目を凝らせば、小さな緑が町中のあちこちに散らばっている。これらは学校や公園に植えられた樹木や、街路の並木であらう。いずれも鳥たちのひと時の休憩地である。

山裾を離れた野生の鳥たちは、石手川の樹林帯を伝って市内に侵入し、城山を一大集散基地として、神社や学校、公園などの小さな緑に立ち寄って、市内全域に広がっていく。庭に野鳥を呼ぶためには、市街地における「緑のネットワークの構築」が必要なのだ。

松山平野の場合だと、既存の社叢林に加えて、学校と公園に小さな森が

整備されれば、ほぼ全域において一キロ以内に緑の島が存在することになり、緑のネットワーク機能は格段に充実する。緑のネットワークは鳥のためだけではなく、さまざまな野生の生きものが町中にやってくるルートともなる。

しかし、学校や公園の緑は貧弱なものが多い。太木は少なく、まして樹林と呼べるものはあまり存在しない。教育現場では、校庭の太木は好ましく思われたいと聞く。子どもが登って危険だから、落ち葉が近隣の民家に舞い込み苦情がでるからなどが、その理由らしい。神社の森も危ない。乾燥化や大気汚染などで樹木は衰弱しつつあり、時には道路拡幅や駐車場のために森の一部が削られる場合もある。

「野鳥の囀る町」「自然の豊かな町」は誰もが望むことだろう。そのためには上空から緑の島を探している鳥たちの視点が必要である。庭に梅の木を植えたからといって、ウグイスやメジロがやって来る訳ではないのだから。

まつい・ひろみつ 松山東雲短期大学教授。専門は植物社会学、環境教育。九月に「四国の樹木観察図鑑」を出版。引き続き「愛媛県の絶滅危惧植物」のまとめに取り掛かる。夏に野村町惣川の青年と一緒に企画している自然体験合宿「みどりの伝言所」も十年目。